村上春樹『チーズケーキのような形をした僕の貧乏』

レポート集

（第29回）2023年11月18日（土）13：45～ 「チーズケーキの…」第1回討論

（第30回）2023年12月16日（土）13：45～ 「チーズケーキの…」第2回討論

2024年1月13日（土） 　　　　　　　「チーズケーキの…」レポート締切

（第31回）2024年1月20日（土）13：45～ 　「チーズケーキの…」第3回討論

目　　　　　次

〇言葉とは何か－村上春樹『チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏』を読む－

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐野　之人 （2）

〇「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」村上春樹　を読んで・・・・・・・・・・・・田中　克典 （6）

〇「チーズケーキのような形をした僕の貧乏」レポート

―1970年代の「若い僕」と「若い日本」へのノスタルジー―・・・・・・・・・・・　Ｔ.Ｔ.　　 　（8）

〇村上春樹「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」を読む

―絶対性の中の相対性―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・渡辺　優 　（10）

〇炎天下で食べるソフトクリームのような形をした私の貧乏・・・・・・・・・・・・・・・・・・大藤　渉　 （12）

〇村上春樹「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」課題レポート

若さとはなにか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岡部　昌平（15）

〇村上春樹『チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏』：読書感想文

『 四軒長屋のレコード・コンサート 』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・奈原　伸雄（16）

〇「僕の貧乏」の象徴としての「三角地帯」

―村上春樹「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」を読む―・・・・村上　林造（19）

〇佐野　之人 （2）

・この「静かさ」と〈暖かさ〉は「貧乏」の只中で、「貧乏」を破って立ち現れて来たものである。「貧乏」に甘んじて一番大切なものを大切にしてきたということがなければ、こうした「本当に幸せ」ということもなかったであろう。

・そのように「僕の貧乏」から離れることで、それが何であるか、何であったかが問題になり得る。こうして次第に「僕の貧乏」はあの「三角地帯」と結びついて「チーズ・ケーキのような形」を取って行ったのだろう。

・ハイデガー（存在忘却）、何もない所から言葉がどう立ち上がって来るのか＝根本経験から離れる

・言葉が立ち上がることで、根本経験が忘却される

〇田中　克典 （6）

・その貧乏の負の部分をほんのり照らしていた正の部分が、あの春の太陽の光だったのではないか。なにせ、その当時（1973～４年ごろ）は、太陽の光は、お金がなくてもいくらでも手に入れることができたのだから。

・12等分したチーズケーキだったからこそ僕の貧乏を多面的にとらえることができたのである

〇Ｔ.Ｔ.（8）

・僕の貧乏　→　チーズケーキのような形をした土地に住むことになった

・僕の若さ　→　悪条件でも元気一杯で、概ね幸せな新婚生活

・「金がなければないで人生はすごく簡単だ」と言えるのは、まだその時代の日本が若かったからではないでしょうか。

〇渡辺　優（10）

・この騒音と静寂の対比は、１か０，on-offの世界であるが、この世界をもたらしているのが「僕の貧乏」である。騒音がひどければひどいほど、僅かな静寂の一時がとても幸せに感じることができるのであろう。

この絶対的な貧乏は、あらゆる生活を対象化させ、僅かな幸福感というものを彼らに与えていた。

〇大藤　渉（12）

・「僕」は、「結婚」と同じように、「貧乏」という言葉を捉えているように思う。「僕」の人生を通して、こんなにも鮮やかに言葉を捉えることができるのは、「貧乏」という言葉に「僕」のあらゆる経験を凝縮させているからではないだろうか。

・「貧乏」という言葉には形がないが、経験によって形（三角地帯）が与えられる。だからこそ、言葉はどこまでも多様な意味をもつことができる。

〇岡部　昌平（15）

・不十分であること、欠如することを受け入れることでそこに生じる力があるとしたら、それが「若さ」ではないか。さまざまな矛盾が絶え間なく生じていても、満たされることも落ち着くこともなく、自ら動くことで囚われることなく過ぎてきた。この短編はそんな70年代と若さをテーマにした作家の「青春グラフティ」なのである。

〇奈原　伸雄（16）

・〝点と点〟との｢コミュニケーションの分断というか分裂｣を、〝円〟が媒介して〝線〟にすることになる。〝点と線〟を〝円〟が媒介することにより〝非連続の連続〟が実現するのである。

・図式的にはこの境涯が、特殊な住環境という極め付きの不幸を、嬉々として選択するからこそ味わうことができる根源的な幸せの、③形而上的要因の正体である。「数学的事実」として

・「形」は村上春樹独自の方法論であると思う

〇村上　林造（19）

・僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった」というこの「幸せ」は、僕が「貧乏」を選んだことによって実現したものであり、両者は切り離すことができないコインの両面をなしているのである。

・ある具体的事象を目に見えない概念やその意味（「僕の貧乏」）の象徴とすることで人間の生き方、考え方とその意義を造形する方法であり、それは象徴的手法による作品創造の方法であるといえる。

比喩，例え、

⦿この小説で作者はどのような表現方法・創作方法を試みているのだろうか？

・この小説では、何が（表現内容）、どのように（表現方法）表現されているのだろうか？

・「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」とはどういうことか？（表現内容）

・「僕の貧乏」を「チーズ・ケーキのような形」（の「三角地帯」）に託して（表現方法）表現するとは？

・「チーズ・ケーキのような形」（の「三角地帯」）に託された「僕の貧乏」とは？

〇楯谷智子　なぜ「チーズケーキ」か？　隠語

食べ物を比喩に遣うのは意表を突く

30度であれば▽定規でもよいのが「チーズケーキ」＝おいしそう

ピンナップガール

・隠喩＝つまんない

・象徴＝何の必然性もないのにそれが使われるのか？　全く関係ないわけではない

小説冒頭で１２等分のチーズケーキ＝食べ物のように眺めてみろ（美味しそうに思えよ！）

皿の上のチーズケーキと三角地帯の土地を読者として結びつけることを求める

「お菓子の家」のような雰囲気

意表を突くのが

〇奈原：①何も思わなかった➡②隠喩（村上春樹は類似性を感じていた）＝同時に象徴でもある（社会問題＝土地の乱開発・狂乱物価）➡➂形而上的要因（人間の幸せの根源的要因）形而上学画存在忘却である＝セックスがテーマのような雰囲気を漂わせながら、問題の核心はそうではない（核心は形而上的要因である）

〇佐野之人：なぜチーズケーキなのか？

いろんなことを考え始めるが、そこにブレーキをかけたい。

本質的なものを見逃す恐れがあり、そこはカッコに入れておきたい。

チーズケーキのような「形」であるのを押さえておきたい。（チーズケーキのような「形」）

読者に語りかけるような親しみやすい軽い口調で進んでいる（「つかみ」程度に押さえておきたい）

〇楯谷：チーズケーキのイメージがないと面白さが低下するように感じる。

「若さ」の一つとして「チーズケーキ」のイメージがあると思う

チーズケーキとしてのイメージ＝おいしそうなモノのイメージ

チーズケーキという言葉で連想するものが佐野と楯谷では違う

〇奈原：形が「ある」、「ない」を分ける考え方（二分法）こそ問題を矮小化すると思う。

隠喩と象徴の「どっちともつかぬ」ものが豊かなものを持っている＝村上春樹の天才性

二分法を形而上学的と言いたい

チーズケーキ＝ピンナップガールという読みで、読みが豊かになると思う

〇渡辺優　チーズケーキのような形＝丸を十二等分すると…

＝数学的絶対的真理：絶対的な貧乏＝「僕の貧乏」＝「騒音」

＝相対的なもの：貧乏だからこそ感じられる「静寂」

佐野＝事実（絶対）と主観（相対）

大藤＝（貧乏を何に喩えるのか？　チーズケーキと言われると他には浮ばなくなる。他の可能性は消えてしまう。理由は分からない。凝縮＝三角地帯に住む一部始終がチーズケーキに纏められる。そこに僕の経験が凝縮される＝解釈と言えば何でも言えるが、それが何で出て来たのかはわからないが、「象徴？」）

佐野＝「凝縮」と言えば必然性があるように感じる。

「僕の貧乏」と「三角地帯」と「チーズケーキ」

岡部＝チーズケーキとチーズケーキの「形」

三角地帯とチーズケーキがイメージ（画像としてイメージ・カメラワーク）としてオーバーラップする、

「僕の貧乏」はそこに何となくにじんでいる。「できそこない」の動的イメージ＝若さの根源＝「落書き」＝矛盾に満ちた70年代を動的に乗り越えて来た

矛盾は静的には許容され得ない、矛盾を乗り越えるのは動き回ること＝社会的にも社会の矛盾を個々の若い夫婦の夢と現実（駆逐艦のブリッジ、若いからねーええ、本当の幸せを経験する）

つじつまの合わないままの処が面白い

楯谷＝チーズケーキの三角地帯＝貧乏そうな人の住むイメージ

インパクトの強い小説だった

今日日こんな結婚する人はない（知的レベルの高い人はこんな結婚しない）

昔の若い人はこんな結婚しない～複雑な世の中を生きているな～時代の違いを感じる

大藤＝こんな結婚は今の人はと言われても分からない

大藤＝ソフトクリームとは「気が付いたら溶けてる不思議さ」を問題にしたかった。

形を問題にしたかった。語り手はチーズケーキを語るのだが、そこ（チーズケーキ）に込められた含意をいくら語っても読み手の解釈が入ってしまって、あくまでも形に止めるべきじゃないかという佐野先生の意見になるほどと思った。

村上：「本文に帰る」

「作品を作品以外のモノに還元しない」

佐野＝常に可能性として「カッコに入れる」という作業をしながら繰り返し読んで行くことになる。

立ち上がって来るものを「待つ」（主体的なだけでは書けない）のではないか。

奈原＝待つだけではレポートを書くということはできない。

・待っていると書けない

大藤＝佐野先生は「あくまでも形に止めるべき」と言われたが、作品や経験を対象にするということは、何か違う問題を抱えるのではないか。その読みをどう対象にして形にするときに、書く手前でカッコに入れるとはどういうことかが問題。

楯谷：決まったものがないのが文学の自由さでもある

村上：だから何でもありということではない

岡部：まず言葉通りで読み取って行き、でもその中でここで何か連想が当てはまって行く者が出来て来る。

言葉とは何か

―村上春樹『チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏』を読む―

佐野　之人

**はじめに**

　『チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏』というタイトルを見て、まず読者は驚き、不審に思うであろう。「貧乏」にそんな形はないと思われるからである。不審を抱きながら読者はこの小説を読み始めることになる。そうして最後まで読むと、「僕は今でも「貧乏」という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す」とある。〈なんだ、「チーズ・ケーキのような形」と「貧乏」との関係は〈連想〉ではないか〉、すなわち〈「貧乏」という言葉を聞くと、かつて「三角地帯」に住んでいたころの「僕の貧乏」を思い出す、ただそれだけのことではないか〉、そう思うであろう。しかしタイトルはそのような表現になっていない。改めてタイトルの意味するところが問題になる。

　「貧乏」とは辞書的には「財産や収入が少なく生活が苦しいこと」となるであろうが、「僕の貧乏」となると、そのような一般的な意味で語り尽くすことはできない。言葉はある意味ですべて象徴と考えることができる。言葉とは、もともと言葉に言い表せないものを音声的ないし視覚的に形にしたものだからである。例えば「山」との出会いは言語に言い表すことのできないものであろう。しかしそうした出会いを通じて、出会ったものを「ヤマ」と音にして名付け、「山」と文字に表すのである。具体的な形で表すことのできないものを具体的な形で表現することを象徴と呼ぶならば、「僕の貧乏」を具体的な形であらわした「チーズ・ケーキのような形」も象徴であり、一種の言葉ともいえるかもしれない。

　辞書的な意味ももともとは言葉に言い表せないものとの出会いに基づいており、そうした原初的な体験の連想と結びついていたに違いない。しかし一度成立した言葉は道具のように用いられることを通じて、分かりきったものになり、その原初的な体験の事柄は忘却され、隠されてしまう。こうした言葉に命を吹き込むのは、分かりきったものとされた言葉の意味を破って輝き現れる体験である。その時その言葉は〈僕の言葉〉となるが、それはそうした根本経験を象徴する形をもつことになる。こうして「僕」にとって「貧乏」とは根本体験に基づいた「僕の貧乏」となり、その新しい言葉ないし文字の形が「チーズ・ケーキのような形」なのである。その形は「僕の貧乏」と連想によって結びついている。

遡って考えるならば、あらゆる言葉の成立にはこうした原初的な体験の連想が結びついていたのであろう。また現在でも我々がある言葉を〈自分の言葉〉として獲得する時には、そこに根本経験の連想が結びついていると考えられるのである。それでは「僕」はどのような根本経験に基づいて、またどのようにして言葉の新しい形を獲得したのであろうか。

**「僕の貧乏」はどのようにして「チーズ・ケーキのような形」を持つに至ったか**

　「（我々は）ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏だった」という表現からすると、「僕」も当初（1973/1974年辺り）、「貧乏」という言葉を辞書的な意味で用いていたと思われる。いささか誇張があるにせよ、本当にお金がなくて生活に困っていたのであろう。それにもかかわらず「金がなければないで人生はすごく簡単だ」とあるように、「人生」の根本的なところを金で押さえてはいないようである。

　お金がないにもかかわらず結婚して、猫まで連れて一緒に住む家を、電車がひっきりなしに通るような都会に探しているのだから、無謀と言えば無謀だ。しかも「布団と衣類と食器と電気スタンドと何冊かの本と一匹の猫、それが我々の全財産だった。ラジオもなければテレビもなかった。洗濯機も冷蔵庫も食卓もガス・ストーブも電話も湯わかしも電気掃除機もトースターも、何ひとつなかった」というのだから、普通に考えたら生活すら成り立たない。それでも「我々」は「まるで我々のために用意されたような家」を「驚異的な掘り出しもの」として不動産屋の貼り紙で見つけることになるのだが、案の定、「住み心地・居住性という観点から見れば」「実に無茶苦茶な代物だった」ということになる。それが「三角地帯」である。

　その「三角地帯」は先端が三十度に尖った「チーズ・ケーキのような形」をしていて、その両側を国鉄線と私鉄線が「乗客と目が合って会釈できるくらい間近に」走る。しかも昼夜を通してひっきりなしに通るのだから、その騒音は想像を絶するだろう。またその騒音の大きさたるや、「特急が通過すると、窓ガラスがピシピシと音を立てた。電車が通っているあいだはお互いの話は聞こえなかった」というのだから、およそ人間の住めるところではない。「僕」の友人が「本当にこんなところに人が住むんだなあ」と感心するのも無理はない。この友人は「僕」と同年代なのだろう。「僕」は「若い」からこうした騒音に「慣れる」と思っているが、この友人の発言からすれば、そういうものでもなかろう。

「居住性」の悪さは騒音だけではない。その「三角地帯」は駅からはすぐ近くに見えるのだが、線路を迂回して陸橋やら坂道やらを通過しなければならず、「おそろしいくらい時間がかかる」という。しかもあたりには商店もない、というのだから不便極まりない。

　また「住み心地」の悪さも騒音だけではない。建付けが悪く、いたるところから隙間風が入るため、「冬は地獄だった」という。「日が暮れると僕と彼女と猫は布団の中にもぐりこみ、文字どおり抱きあって眠った。朝起きてみたら台所の流し台が凍りついていたなんてこともしょっちゅうだった」そうだ。

　ところが「僕」はこうした「三角地帯」の「住み心地・居住性」の悪さをあまり気にしていないようである。第一に「僕」は地元の人々にどうして「三角地帯」がこんな形になったのか尋ねている。そんなことより「住み心地・居住性」について聞くべきではないだろうか。また地元の人たちが「三角地帯」について「しゃべりたくないし考えたくもないという感じ」なのは〈あそこは人が住むようなところじゃないよ〉と言い出さざるを得ないからに決まっているのに、「僕」は「どうして「三角地帯」がそんな風に―耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱われるのか、その理由はよくわからなかった。たぶん変な形をしていたせいだろう」で済ませている。第二に「三角地帯」からの二種類の線路の眺めについて「これはなかなかの眺めである。「三角地帯」の先端で電車の往き来を眺めていると、まるで波を割って海上をつき進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる」などと気楽に喜んでいる。そうして「家の雰囲気」が「僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた」のを決め手にこの家を借りることに決めてしまう。騒音については「なんとか慣れる」と考えている。およそ信じがたいことである。

　しかし今、どうしても結婚して、猫と一緒に住みたいということであれば、これに類した家を借りるほかはないであろうし、その障害となるものについても、「駆逐艦」で「波を割って海上を割って突き進む」が如くに、何とか乗り越えようとするだろう。そもそもそうした障害についてもあまり気にならない。これが年齢とは本質的に関係のない〈若さ〉である。〈若さ〉は生死を超えて本当にしたいことをまず考える。これに対し生死の方から物事を考えるのが〈老い〉だ。生きるためにはもちろんお金がいる。そればかりではない。生きるということは人間の場合、他人からも存在を認めてもらい、それによって自分も自分の存在を認めることができるということだから、生きるためには地位も名誉・評判も必要、ということになる。「僕」は（そうしておそらく「彼女」も）お金がないからと言って、お金のために働きに出ようとは思っていない。そのことは鉄道がストライキで止まってしまっても何も困っていないことから分かる。「僕たち」は仕事についても〈若い〉考え方をもっていると言えよう。また〈若さ〉は仕事についても、地位・名誉・評判を第一に考えたりはしないだろう。

　同じことは結婚についても言える。「僕たち」にとって結婚とは一緒に住みたいという願いが形になったものに他ならない。制度としての結婚によって親類や社会に認められるとか、子孫を残すなどということが重要なのではない。「僕たち」の願いとしての結婚と制度としての結婚とのこうしたギャップは、「僕」が、結婚しているにもかかわらず、妻のことを妻とは呼ばずに「彼女」と呼んでいる点にも表出しているが、以下の二人のやり取りにはっきりと表れている。

「ここでこんな風にじっとしているとさ、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」

「だって本当に結婚したんじゃない？」

「そりゃあまあそうだけどさ」と僕は言った。

これが結婚に関する〈若さ〉、つまり「結婚したばかり」ということであり、これは本質的に何年結婚しているかということに関わらない。そこには役割ではない友愛関係・恋愛関係が永続している。

　とはいえ実際の生活は「貧乏」、つまり「財産や収入が少なく生活が苦しいこと」そのものだ。「苦しさ」にはもちろん「騒音」も含まれる。しかし〈若さ〉故に「貧乏」に甘んじることが、こうした「貧乏」でなければ経験することのできないものを「僕たち」に経験させることになる。それが以下の文章だ。

冬が終わると、春がやってきた。春は素敵な季節だった。春がやってくると、僕も彼女も猫もほっとした。四月には鉄道のストライキが何日かあった。ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった。電車は一日じゅうただの一本も線路の上を走らなかった。僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった。

ここで読者は「僕たち」とともに根底的な「静かさ」といっぱいの太陽の暖かさを体験するだろう。しかしこの「静かさ」と〈暖かさ〉は「貧乏」の只中で、「貧乏」を破って立ち現れて来たものである。「貧乏」であるが故の「騒音」がなければ、この「静かさ」を経験することはできないだろうし、「貧乏」であるが故の冬の寒さがなければ、この〈暖かさ〉を経験することもできないだろう。そうして「貧乏」に甘んじて一番大切なものを大切にしてきたということがなければ、こうした「本当に幸せ」ということもなかったであろう。

　これがありきたりの「貧乏」という言葉を破って経験された「僕の貧乏」である。こうした根本経験の端的は「僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった」に表れているが、注意しなければならないのは、この根本経験を語っているのが現在の「僕」だということである。このように語る者は、すでに若くないし、結婚したばかりではないし、太陽の光はただだとは感じられない者である。

儘ならぬ人間の身を生死していることを知るのが〈老い〉であり、それを知らぬのが〈若さ〉である。なるほど「僕」は、現在においてもおそらく、お金や地位・名誉を第一に考えるようなことはないだろう。しかしそれでも生きていくうえでお金や地位・名誉が必要であることは理解しているだろう。少なくとも身体はもはやあのような「騒音」には耐えられないだろう。そのことは「今思い出してもたいしたものだという気がする」という言葉によく表れている。その意味では「俺、あそこ行くと頭痛むんだよ」と言って「三角地帯」の貸家の下見に「僕たち」だけで行かせ、「慣れる」と言った「僕たち」のことを「ま、若いからね」と言った不動産屋は十分に〈老い〉ていると言える。そうした劣悪な「住み心地・居住性」を避けようとすれば、もちろんお金が要る。「僕」はおそらく物書きを生業としていると思われるから、お金を稼ごうとすれば名誉・評判、そうして社会的な地位も要るだろう。そうしたことを理解していることが〈老い〉である。

　結婚についても同じことが言える。「僕」は相変わらず妻のことを「彼女」と呼ぶ〈若さ〉を失ってはいないが、それでも結婚生活に伴う様々な社会的な制約や利便性も理解しているだろう。それが〈老い〉ということである。

　そうして何より、あの過酷な「貧乏」の中でしか経験のできない「静かさ」と〈暖かさ〉は味わいようがない。すでに身体はあのような「騒音」には耐えられないことが分かっているからである。「貧乏」から脱している「僕」は、太陽の光をいっぱいに浴びて「太陽の光はただだ」と言うことがもうできない。

　このように「僕」は「貧乏」を脱することで「僕の貧乏」からも離れることになるのだが、そのように「僕の貧乏」から離れることで、それが何であるか、何であったかが問題になり得る。「僕の貧乏」の只中にいてはそのことは問題にはなりえないだろう。こうして次第に「僕の貧乏」はあの「三角地帯」と結びついて「チーズ・ケーキのような形」を取って行ったのだろう。

　「僕たち」は「三角地帯」に二年住んで、その後別のところに引っ越している。どのような事情があったのかは分からない。しかし「貧乏」という言葉を聞くたびに、もはやありきたりの分かりきった普通の意味ではなく、「僕たち」の貧乏、言い換えればほかの誰のものでもない、「僕の貧乏」という意味で理解し、必然的にあの「三角地帯」を連想したのである。その時、苦しかった生活とともに、あの「静かさ」と〈暖かさ〉、そうして「本当の幸せ」をも具体的な形で想い起していたに違いない。

　語り手は「今あの家にはいったいどんな人が住んでいるんだろう？」という言葉でこの小説を結んでいるが、おそらくそこにも新しい「貧乏」の形があることを想像しつつ、「貧乏」という言葉の、さらにはあらゆる言葉の根源にある、どこまでも豊かな内容に暖かく思いを馳せているのではないだろうか。

「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」村上春樹を読んで

田中 克典

　私たちは、生きていく中で、絶えず、様々な事象に遭遇する。そのような経験によって、私たちの生活はなりたっている。そして、そのような個々の事象に対する捉え方は各人それぞれである。一面的なとらえ方、多面的なとらえ方、いろいろあろうが、それは、その人のその時の状況によっても変わってくるだろう。ただ、やはり、どんな事象でも、多面的にとらえてみることで、生きていることの面白さは増していく気がする。

　今回の「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」も、貧乏を多面的にとらえた一作だと読んだ。すなわち、１９７３年か１９７４年のころのギネス・ブックに載ってもおかしくないくらいの僕の「貧乏」を、正の面（僕にとってある種の心地よさをもたらす面）と負の面（僕にとって、つらさ等が際立つ面）から見つめ直したものだ。

　主人公の僕は、一にも二にも安い家賃にひかれて、ホールサイズの丸いチーズ・ケーキを十二等分したような三角地帯に建てられた一軒家に、彼女と猫と住むようになった。

三角地帯の両脇には二種類の鉄道路線が走り、その先端で電車が行き来する。三角地帯から眺めるその光景は、まるで、波を割って海上を突き進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる。

しかし、その爽快感とは裏腹に、住み心地・居住性という観点からはみれば実に無茶苦茶な代物だった。まず、昼夜を問わない騒音である。彼女との会話もうまく進まない。さらには、駅からの歩くと、辿り着くまでにおそろしいくらい時間がかかる。しかもあたりには商店とか一切ない。

　ただ、家の雰囲気自体はなかなか悪くなかった。それは、僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ており、僕にとって、結婚して家庭を持っているような気分をもたらしてくれたのである。

　こんな家に住んでいた僕は、とにかく貧乏だった。

引っ越しは友人のライトバン一台で十分間に合った。家電製品もほとんどなかった。それぐらい貧乏だった。

反面、金がなければないで人生はすごく簡単だ、僕はこんな風にも割り切っていた。

　春夏秋冬、一番大変だったのは冬だ、ストーブが買えないので、彼女と猫と布団で団を取って居た。

それだけに、春は素敵な季節だった。鉄道ストライキで電車が走らず、騒音がない。線路でのひなたぼっこは快適だ。太陽の光はただだった。貧乏人にも太陽は欲しいだけ光を与えてくれる。

　このように、この物語には、三角地帯での暮らしのポイントについて、負の部分だけではなく、必ず正の部分が盛り込まれている。この書き方に私は着目した。

このことが、タイトルに「チーズ・ケーキのような形」という表現を用いたことにも通じているのではないか。「三角地帯」自体は、なぜ、こんな形の土地があるのか地元の人に聞いてもよくわからない、常識では考えられないような所謂負の象徴のようなものである。

しかし、僕は、その三角地帯とそこでの暮らしに、上述したようにいろんな角度から正の部分を見つけている、僕にとって、それら正の部分を象徴した言葉が「チーズ・ケーキのような形」だったのではないか。ただ、ここで登場する三角地帯について、負の部分を見つけることは比較的容易（むしろ、負の塊りにしか見えない）かもしれない。そうであるだけに、その正の部分を見つけること、なかんずくある事象が正の部分であることを見極めることは必ずしも簡単ではない。そのことの象徴として、誰でもすぐに甘さのわかる「チョコレート・ケーキ」ではなく、「チーズ・ケーキ」を用いたのではないか。考えてみると比喩というのは面白い。

この三角地帯は、当時の僕の貧乏の象徴だ。でも、その貧乏の負の部分をほんのり照らしていた正の部分が、あの春の太陽の光だったのではないか。なにせ、その当時（１９７３～４年ごろ）は、太陽の光は、お金がなくてもいくらでも手に入れることができたのだから。

ただ、ここで、留意すべきは、所謂ホールサイズの丸いケーキを１２等分した三角地帯だと云うことである。これは、僕の貧乏にとっては、これ以上細くは切り分けられないような形だったのではないか。すなわち、これより細く切ってしまうと、そこに僕の貧乏についての正の部分など到底見いだせなかったのではないか。また逆に、１２等分より大きく切り分けられた場合、正の部分と負の部分との割合も変わってしまったのではないか。なにはともあれ、１２等分したチーズケーキだったからこそ僕の貧乏を多面的にとらえることができたのである。

ところで、今の時代はどうだろうか？言葉としては、「貧乏」ではなく、「貧困」と云われる。その「貧困」に付きまとうのは、「自己責任」である。ひなたぼっこを自由にする場所すら限られている。「現代の貧困」に、「正の部分」はあるのだろうか、「正の部分」を見出す余裕が私たちにあるのだろうか？

このような現代に生きる我々にとって、いま、生きている時代を改めて考えてみるきっかけとなるような物語として読んでみた。

以上

「チーズケーキのような形をした僕の貧乏」レポート

－1970年代の「若い僕」と「若い日本」へのノスタルジー－

Ｔ・Ｔ

12月の文学読書会にはほぼ参加出来ず残念でした。

ちょうど読書会が行なわれていた時間帯は、仕事で大阪に向かうところでした。電車に乗っている間に、少しの間でしたがスマホから聴講させていただきました。

ちなみに、宿舎は西梅田のビジネスホテルだったのですが、JR線に隣接しており、客室からは線路がほぼ真下に見えました。さぞかし煩いのではと思いきや、非常に静かでぐっすり眠れました。数年前にリニューアルされたとのことで内装は綺麗で、狭いことを除けば快適だったのですが、騒音対策も十分施されているのだろうと思いました。

***「僕の貧乏」は「僕の若さ」の言い換え***

この小説は1970年代の「若くて貧乏だった僕」を1980年代の（おそらく中年にさしかかっている）「僕」が回想しているものです。

「若者は元気と時間があるがお金がない。中年はお金と元気はあるが時間がない。老人は時間とお金があるが元気がない。」とは、誰が言ったものか失念してしまいましたが、聞いたことがあります。

「若い＝貧乏」とは、少数の例外を除けば広くあてはまると思います。（「老人＝金持ち」の例外は多いと思われますが。）

若いということは、貧乏だということなのです。

「我々は結婚したばかりで、自慢するわけじゃないけれど、ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏だった。」とありますが、貧乏が強調されるほど「僕」の若さが強調される感じがします。そんな貧乏にもかかわらず結婚していますが、それは「若い＝元気と時間はある」から可能なのでしょう。（昨今は「お金がないから結婚できない」という人が多いですが、本当に足りないのはお金ではなく、元気あるいは時間なのかもしれません。）

***「チーズケーキ」の２つの意味***

タイトルに含まれる「チーズケーキ」という言葉は意表を突くものです。小説の冒頭には「我々はその土地を『三角地帯』と呼んでいた。それ以外にどう呼べばいいのか僕には見当もつかなかった。」とありますから、土地の形を表すだけならそのまま三角地帯と呼び続けてもよさそうなものなのに、何故チーズケーキと呼び直したのでしょうか。

私はその理由を、チーズケーキと呼んだ方が美味しそうだから、と考えます。

「まずはホール・サイズのまるいチーズ・ケーキを思い浮かべていただきたい。それからそれを包丁で十二等分していただきたい。（中略）そのひとつを皿にとって、紅茶でもすすりながらじっくりと眺めてください。」とありますが、実際にそうすればきっと「何だか美味しそう」と思うはずだからです。

私は知らなかったのですが、チーズケーキについてウィキペディアで調べていたら以下のような記述がありました。アメリカではピンナップガールのことをチーズケーキと言うらしいです。

●ウィキペディア「チーズケーキ」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%BC%E3%82%BA%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%AD>

チーズケーキは英語において、セックスシンボルである女性を表す時にも用いられる。グラビアに写っている女性にまつわる話題であれば、特にその用例が見られる。

●Wikipedia, “Pin-up model”

<https://en.wikipedia.org/wiki/Pin-up_model>

A pin-up model is a model whose mass-produced pictures and photographs have wide appeal within the popular culture of a society. Pin-up models are usually glamour models, actresses, and fashion models whose pictures are intended for informal, aesthetic display, such as being pinned onto a wall. Moreover, beginning in the 1940s, pictures of pin-up girls were also known as cheesecake in the U.S.

作者はこのことを知っていたでしょうか？知っていたのかもしれません。

知らなかったとしても、チーズケーキ（通常、飾り気のないシンプルなスイーツ）という言葉に甘酸っぱい新婚生活を含意した可能性は十分あると思います。

 僕の貧乏　→　チーズケーキのような形をした土地に住むことになった

 僕の若さ　→　悪条件でも元気一杯で、概ね幸せな新婚生活

このような「僕の貧乏」の若さゆえの両面性について一言でまとめると「チーズケーキのような形をした僕の貧乏」になる、と考えると、やっぱりこのチーズケーキという言葉が絶妙で、この一言によって作品全体が面白くなっているような気がします。

***「若い日本」へのノスタルジー***

「金がなければないで人生はすごく簡単だ」という言葉が気になります。「金があればあるほど人生は複雑になっていく」という意味にもなるからで、それは確かにそうだと思います。

この言葉は80年代の「僕」（おそらくはお金を手にし、それにつれ人生が複雑になってきている）がレトロスペクティブにそう言ってるだけで、三角地帯に住んでいた頃の「僕」の感想ではなさそうです。それは、80年代の「僕」がレトロスペクティブに「チーズケーキのような形」と言ってるだけで、三角地帯に住んでいた頃の「僕」が単に「三角地帯」と呼んでいたのと同様、懐古的な眼差しだと思います。

それにしても「金がなければないで人生はすごく簡単だ」と言えるのは、まだその時代の日本が若かったからではないでしょうか。そのような日本はいつの間にか終わってしまったような気がします。作者の懐古的な眼差しが「若い僕」のみならずその時代自体にも向けられているのかどうか、この小説でははっきり述べられている訳ではありませんが、まあ多分そうだろうという気がします。

小説の結びの「今あの家はいったいどんな人が住んでいるんだろう？」という疑問の裏側にも、「時代はすっかり変わってしまったから、あえて住もうという人がいたとしたら『僕』とは全然違うはず」という作者の思いがありそうな気がしています。

『チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏』を読む

―絶対性の中の相対性―

渡辺　優

　「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」は1973年・4年頃の時代を背景とした語り手「僕」の思い出話である。1973年ごろの日本はちょうど経済成長まっただなかで、庶民の生活はまだまだ豊かとはいえない時代であった。語り手「僕」はこの頃に結婚しそして、1戸建ての賃貸住宅を求めていた。

**１．「チーズ・ケーキのような形」とは**

題名に含まれている「チ－ズ・ケーキのような形」を「僕」は以下のように説明する。

「我々はその土地を「三角地帯」と呼んでいた。「三角地帯」とは、フォール・サイズの円いチーズ・ケーキを12等分したら、その一つの頂点の角度が30度になるケーキ・ピースが「三角地帯」の正確な形である。」

この形は数学において真理であり絶対的なものである。古代より変わりはしないし、未来永劫変わることはない。僕はそのことを下記のように語る。

「それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形であるに違いないという程度のことしかわからなかった」

**２．「僕の貧乏」とは**

一般的に言われている貧乏とはなんであろうか。物質的な欠乏状態か、電化製品がなくても衣食住が揃っていれば生活は出来る。裕福なものから見たら生活ができる程度の水準は貧乏に見えるかもしれない。貧乏の意味合いには自分自身の経済状態から考える生活水準があり、その生活に到達できない場合、自分は貧乏と思うのであろう。したがって、貧乏の捉え方は個人個人違うものと考える。

そして、「僕の貧乏」とは、ラジオもテレビも洗濯機も冷蔵庫もほとんどの電化製品や家具のない物質的な貧乏である。住環境は悪いが、衣食住はそろっているので生活に困窮しているとは言えないし、むしろ貧乏そのものを楽しんでいるのではないかと思える。

**３．対称性と貧乏**

「三角地帯」の両脇には2種類の鉄道線路が走っているため、騒音がひどい。騒音がひどいということを想像させるためにあらゆる状況を説明する。「玄関の戸を開けると目の前を電車が走っているし、裏側の窓を開けるとそれはそれで別の電車が目の前を走っている。終電なんて存在しなかった。明け方までかけて貨車がひととおり通り過ぎてしまうと、翌日の旅客輸送が始まる。その繰り返しが来る日も来る日も延々と続くわけだ。」不動産屋の担当者は頭が痛むので、その場所には行きたがらない。「特急が通過すると、窓ガラスがピシピシと音を立てた。電車が通っているあいだはお互いの話は聞こえなかった。何かを話している最中に電車が通ると、我々は口をつぐんで電車がすっかり通り過ぎてしまうのを待った。静かになって我々が話しはじめると、またすぐに次の電車がやってきた。そういうのってコミュニケーションの分断というか分裂というか、すごく**ジャン＝リュック・ゴダール**風だ。」と比喩する。

ジャン＝リュック・ゴダール（仏：1930－2022）

[フランス](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9)の[映画監督](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A0%E7%94%BB%E7%9B%A3%E7%9D%A3)。[編集技師](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A0%E5%83%8F%E7%B7%A8%E9%9B%86)・[映画プロデューサー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A0%E7%94%BB%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%87%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B5%E3%83%BC)・[映画批評家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A0%E7%94%BB%E8%A9%95%E8%AB%96%E5%AE%B6)・[撮影監督](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%92%AE%E5%BD%B1%E7%9B%A3%E7%9D%A3)としても活動し、[俳優](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%B3%E5%84%AA)として出演したこともある。

はじめ映画批評家として出発したが、『[勝手にしやがれ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%9D%E6%89%8B%E3%81%AB%E3%81%97%E3%82%84%E3%81%8C%E3%82%8C_%28%E6%98%A0%E7%94%BB%29)』（1960年）ほかの作品で[トリュフォー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%AF%E3%83%BB%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%A5%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%BC)や[シャブロル](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%96%E3%83%AD%E3%83%AB)と並ぶ[ヌーヴェルヴァーグ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8C%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%AB%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%82%B0)の旗手とみなされるようになり、独創的な[カメラワーク](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%A1%E3%83%A9%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF)や大胆な編集技法によって映像表現の世界に革命をもたらした。注目度の高さから、20世紀の最も重要な映画作家の一人とも称される。

『勝手にしやがれ』の1場面に、一緒に逃げることを断念したパトリシアが警察に通報してしまう。劇中も何度か出てきた「最低」という言葉を最後にミシェルが言う。「本当に最低だ」と、かすれ声で言われたその言葉が訊きとれず、パトリシアは「彼はなんて言ったの？」と刑事にたずねると、「あなたは本当に最低だと彼は申していました」と伝えられる。パトリシアは「最低ってなに？」と訊き返す。という会話がある。＜wikpediaより＞

これだけの状況が提示されれば、この騒音のひどさは、生活に支障をきたす程のひどさと考えられる。しかし、4月になると鉄道会社のストライキが起こりまったく電車が走らなくなると「まるで湖の底に座っているみたいに静かだった」というように静寂が訪れるのである。

この騒音と静寂の対比は、１か０，on-offの世界であるが、この世界をもたらしているのが「僕の貧乏」である。騒音がひどければひどいほど、僅かな静寂の一時がとても幸せに感じることができるのであろう。

　また、家自体は古くて傷んではいたが、子供のころに住んでいた家のなつかしさがあり、「僕」は気に入っていた。しかし、建付けが悪いためすきま風が入り冬の寒さはひどいものであった。そのため、温もりを求めて「僕と彼女と猫は布団にもぐりこみ、文字通り抱き合って眠った」り、日向ぼっこをしたりして僅かな幸せを感じていた。ここにも寒さと暖かさの対比があり、厳しい寒さの中だけに僅かな温もりでも暖かく感じることができるのである。そのような状況をもたらしているのも「僕の貧乏」が故である。

そして、「僕の貧乏」とは、物質的に欠乏状態でどうすることもできない絶対的なものとして、そのことを「チーズ・ケーキなような形」と比喩している。この絶対的な貧乏は、あらゆる生活を対象化させ、僅かな幸福感というものを彼らに与えていた。若く、新婚時代の二人にとって「貧乏」とは、今ではノスタルジーであり、

「僕は今でも「貧乏」という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す。今あの家にはいったいどんな人が住んでいるんだろう？」

と、昔の新婚時代を思い出し、「今あの家に住んでいる人たち」も我々と同じように貧乏で苦労をし、僅かな出来事に一服の幸福感を味わっているだろうかと思いを寄せているのであろう。

以上

炎天下で食べるソフトクリームのような形をした私の貧乏

大藤　渉

　貧乏に形はない。土地には形がある。村上春樹の短編小説である「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」は、本来、形のない貧乏に対して、チーズ・ケーキのような形を与えている。どうしてそのような不自然な形の貧乏ができてしまったのか。その原因はよくわからない。ただし、「僕の貧乏」というからには、「僕」が生きている中で形を成して現われた貧乏である。どんな風に生きたら貧乏が、チーズ・ケーキのような形をしたのだろう。

　「我々はその土地を『三角地帯』と呼んでいた」。土地には三角のように形がある。人々は、その土地の上に住んでいる。僕と彼女が住んでいるのは「絵に描いたような三角形の土地」だった。絵に書いたような三角形ってどんな形だろうか。それは、「くさびのような形」だ。「もう少しくわしく説明するなら、まずはフォール・サイズのまるいチーズ・ケーキを思い浮かべていただきたい。それからそれを包丁で十二等分していただきたい」。何でチーズ・ケーキなのかはよくわからないが、チーズ・ケーキが12等分にされた。その先端の角度は当然30度である。「これが―この先のとがった細長いケーキ・ピースが―我々の『三角地帯』の正確な形である」。これが、絵に描いたような三角形の土地である。絵に描いたような三角形ってそんな形だろうか。

　我々に見えるのは、すでにできてしまった土地である。できあがる前の土地は見えない。形をなしていないものは普通、目に見えない。何故そうなったのかという問いは、形を成している土地を問題にしているけれども、その土地がその土地になる以前を問題にしている。まだ形を成していないものを問題として相手取ると、結局、できの悪い作り話でもってわかった気になるか、やっぱりよくわからないというところに行き着いてしまう。こちらがその形について、あれこれ思いを巡らせたとしても、依然として土地は三角形のかたちを保ったままそこにある。

　我々ができあがった形を見るときは、その形に色々な思いを付箋のように貼り付けてしまう。たとえば、その土地について、「あまりしゃべりたくない」とか「考えたくもない」とかいった負の感情を貼り付ける。この思いも、土地と同じようにできあがった後の感じはつかむことができる。けれども、その感じができあがる前はよくわからない。よくわからないけれども、地元の人々にとって、「三角地帯」は「耳のうしろのいぼみたいに」余分なものだった。余分なものは、特になくても大抵困らない。むしろ無い方がよいものだ。「三角地帯」がなぜそんな風に冷たく扱われるのかは、「たぶん変な形をしていたせいだろう」と勝手に理由をつけて納得するほかない。「僕」は、地元の人々がそういう感じを受ける理由がよくわからないから、後々その場所に入り込んでしまうのだろう。

　「三角地帯」という土地は一日中騒音がひどかった。「僕」はそれを分かった上でそこに住んだ。なぜなら、とにかく家賃が安かったからだ。「我々」は貧乏だった。それは、ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらいの貧乏だった（まだ、貧乏はチーズ・ケーキのような形をしていなかった）。だからその驚異的な掘り出しものを選んだのだ。不動産屋は「あそこ行くと頭痛むんだよ」という理由で、内見に付き添わなかった。そこに行くとき、不動産の頭が痛むのは、騒音のせいだろうか。それとも別の理由があるのだろうか。その理由はよくわからない。

「駅から見ると『三角地帯』はすぐ近くに見える。でも実際に歩いてみると、そこに辿りつくまでにはおそろしいくらい時間がかかる」。こう言われると何だか貧乏の象徴みたいだ。貧乏だと家賃という条件にあう物件があまりない。そもそもの選択肢が少ない。「彼女」と一緒に住み、それに猫も、とくれば「僕」には選択肢がない。けれども、時間はある。貧乏だとすぐ近くに見えるのに、時間がかかる不便で辺鄙な場所に住まなければならなくなる。そんな場所に住むことができたのは、お金がないけど時間はあるからだろう。もちろん、貧乏という言葉に「時間はある」といった意味が、はじめから含まれているわけではない。だが、「僕」がこんな風に生きることで「貧乏」という言葉に少しずつ形を与えていくのだ。

「三角地帯」ハウスは、騒音がひどく、「彼女」との会話もままならない。何かを話している最中に電車が通ると、「僕」と「彼女」は口をつぐんで電車が通り過ぎるのを待っている。静かになって話し始めようとすると今度は次の電車がやってきて、また会話が止まる。こんな風に、「三角地帯」ハウスでは、生活をともにする者との会話すらままならない。考えれば考えるほど不便な家である。しかし、「僕」はそこに住むことに決めた。「僕」がいうには、その理由は、家賃はもちろんのこと、騒音を別にすれば雰囲気も悪くなく、窓から差し込む光が、畳の上に小さな四角い日だまりを作り出していたからだ。

そんな「三角地帯」ハウスに住み始めた「僕」と「彼女」は、それなりに生活を楽しんでいた。洗濯機も冷蔵庫も何一つなかった。だから、引っ越しもすごく簡単だった。貧乏というのは人生を簡単にしてくれる。「三角地帯」ハウスは建てつけが悪く、冬は地獄のように寒かった。だから、そんな日は「僕と猫と彼女」は抱き合って眠った。厳しい冬が終わり春が来ると、鉄道のストライキが何日かあり、騒音に苦しまない日もあった。いつも騒音がひどかったから、そんな日は「僕たち」にとって「本当に幸せだった」。

「僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった」。まさに、「これぞ幸せ！」と言わんばかりだ。

だが、そんな生活は長くは続かなかった。「三角地帯」ハウスには、２年しか住まなかった。そしてこの物語の最後には、「僕は今でも『貧乏』という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す。今あの家にはいったいどんな人がすんでいるのだろう」とある。おそらく、これを語っている今の「僕」は、「三角地帯」ハウスに住んでいた頃よりもおそらく裕福になり、年もとったのだろう。もしかすると、裕福になったわけではなく、「彼女」や「猫」と別れたのかもしれない。年をとって、「三角地帯」ハウスを巡る出来事を振り返ったとき、「僕」の「貧乏」は、とても良いものだったというような印象を受ける。トラブルや不便さはあったであろうが、むしろそれを逆手にとって楽しんでいるかのようでもある。そして、それが「本当に幸せだった」のである。

一般的に、貧乏というとき、あまり良い印象を抱かないことの方が多いだろう。貧乏であると、買うものも住む場所も食べるものも制限されてしまう。しかし、僕の「三角地帯」ハウス物語を読むと、貧乏であった僕の人生がとても眩しい。

そしてなにより、極め付けは「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」という題名である。僕が「三角地帯」ハウスでの生活を後から振り返った時に、「三角地帯」ではなく、「チーズ・ケーキ」という言葉を使ったのは、その思い出が、チーズ・ケーキのようになんの飾り付けもなくシンプルであるけれど、ほんのりと甘いと思ったからだろう。しかし、それでは僕が大変だけれど幸せだった生活を生み出す原因となった「三角地帯」ハウスの存在がなおざりである。そこで、「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」としたのではないだろうか。だとすると、壮大な惚気話をされているみたいだ。

ところで、一つ気になる箇所がある。「僕」と「彼女」のある会話である。「僕」は「彼女」にいう。「ここでこんな風にじっとしているとき、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」と。「彼女」は次のように返す。「だって本当に結婚したんじゃない？」「そりゃあまあそうだけどさ」と「僕」は言う。この場面は、「僕」と「彼女」のリアリティの感じ方の相違を表しているように思う。「僕」にとって「結婚」という言葉のリアリティは、経験しないと感じられないものである。だから、「彼女」と一つ屋根の下でじっとしているときに、はじめて「結婚」のリアリティを感じることができる。「結婚」という言葉にはあらかじめ形が与えられていない。けれども、「彼女」からすれば、結婚するということが本当の「結婚」である。結婚するということと「結婚」という言葉のあいだにずれはない。リアリティを感じられないということがない。この小説のなかでは、「僕」と「彼女」のリアリティの感じ方の相違が、これ以上描かれることはない。それでも、「三角地帯」ハウスに2年住むなかで、その相違がどのように影響したのか考えてしまう。

「僕」は、「結婚」と同じように、「貧乏」という言葉を捉えているように思う。「僕」の人生を通して、こんなにも鮮やかに言葉を捉えることができるのは、「貧乏」という言葉に「僕」のあらゆる経験を凝縮させているからではないだろうか。「僕」の貧乏は、あるときはギネス・ブックに載るほどの貧乏であり、あるときはラジオもテレビも何ひとつない貧乏である。「僕の貧乏」は、その経験の果てに「チーズ・ケーキのような形をした」。だから、「僕は今でも『貧乏』という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す」。その土地に住んでいる人に思いを馳せてしまう。

「貧乏」という言葉には形がないが、経験によって形が与えられる。だからこそ、言葉はどこまでも多様な意味をもつことができる。「貧乏」という言葉は、「僕」のこれまでの経験を結び合わせ、その経験を思い出させるきっかけになる。ある言葉を何と例えるかに、その人の生が表れる。それでは、私の貧乏は何と例えられるだろうか。もう少し人生を歩まなければ見えてこないかもしれない。

村上春樹「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」課題レポート

若さとはなにか

2024年1月14日

岡部　昌平

　ある若い夫婦の70年代初頭の「貧乏」がこの短編のほとんどを占める。そこに描かれているのは社会から隔絶された「三角地帯」の光景ではあるけれど、虐げられたり抑圧されたりしている様子はないし、好んで貧乏を受け入れているようにすら思える。

　夫婦の貧乏は「ラジオもなければテレビもな」く、「洗濯機も冷蔵庫も食卓もガス・ストーブも電話も湯わかしも電機掃除機もトースターも、何ひとつない」ことを内容とする。それは三角地帯の外にある標準的な家庭との比較において相対的に家財がすくないことであり、その暮らしは相対的に低い家賃の住宅によって外の世界と均衡する。衣服に幾つもツギがあたり、家族に病人をかかえ、その日食べるものにも事欠いて雨漏りする長屋で暮らす貧乏でもなければ、強欲な地主に過酷な労働を強いられているわけでもないのである。そのような「70年代の貧乏」が意味するものは何か。

　この短編の視覚的、聴覚的な効果にも注目したい。短編の舞台は12等分されたチーズ・ケーキが皿にのった「不自然な形」であり、昼夜を問わず「不自然な角度」で南北に走り抜ける電車の騒音によってコミュニケーションは分断される。三角形に切りとられたもの、嚙み合うことのない会話、どこをとっても完結することも、連続することもない不完全さが視覚にも、聴覚にも迫ってくる。

　満足することや、完成することを拒んでいるような若い夫婦の暮らし。不十分であること、欠如することを受け入れることでそこに生じる力があるとしたら、それが「若さ」ではないか。さまざまな矛盾が絶え間なく生じていても、満たされることも落ち着くこともなく、自ら動くことで囚われることなく過ぎてきた。この短編はそんな70年代と若さをテーマにした作家の「青春グラフティ」なのである。

村上春樹『チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏』：読書感想文

『 四軒長屋のレコード・コンサート 』

Jan.10.’24

奈原 伸雄

I　”埴生の宿 ”

経済成長とともに成長した世代には、かつて自分が住んでいた家地を実際以上に卑下する傾向がある。私が20歳代後半に住んだのが、木造二階建ての四軒長屋。ちょうど本文に見える｢一九七三年だか四年だかの話｣で、私もここに｢二年住んだ｣ ( ｢ ｣内はテキスト『村上春樹全作品』版からの引用。以下同じ）。記憶に残る建物のイメージは、さながらベニヤ板を貼り合わせたような外貌で、小説の主人公が余りにも悲惨に描いた｢僕の記憶｣とは、また別の条件において｢見事なくらいうらぶれている｣のである。｢僕｣が住む｢三角地帯｣が、｢チーズ・ケーキを…十二等分｣したようなやけに｢細長い｣土地であっても、彼がそれを｢ケーキ・ピース｣と呼ぶごとき瀟洒な雰囲気など当方には望むべくもなく、｢二種類の鉄道線路｣が走る、特に〝私鉄沿線〟と歌われたような都会的な賑わいはない。当然のこと、新婚所帯に相応しからず、それはそれはびたロケーションであった。しかし、それでも、あるいはそれにも拘らず、｢家の雰囲気自体はなかなか悪くなかった｣。五月にでもなると、〝長州はいい塔をもっている〟**1)**と司馬遼太郎が褒めた山口市瑠璃光寺の五重塔が、北側の二階の窓から新緑に映えるのが垣間見えて、弟が来て泊まった朝など〝何と気持ちのいいところか〟とさわやかなみを楽しみながら起き上がったものだ。その後、弟は友達を数名も連れて来て連泊したりした。

Ⅱ ”円い直線 ”

このような多義性を備えた追憶の片隅にあるのが、２階の板の間で行った何とレコード・コンサート。今考えたらよくぞここまでとに思える粗末なスペースに、乾いた音がバリバリ鳴るダイヤトーンとか、音の波が静かに流れるタンノイ系とかのスピーカーを置いて聴き比べをする。聴き比べのソフトは、ドイツ・グラモフォンやCBSソニー・レーベルなどの名曲と名演。白眉は、何と言ってもモオツァルトのト短調シンフォニー。そして、鑑賞の拠り所となるのが、決して音楽の専門家とは言えない小林秀雄であった。の独特の批評文学に通暁した先輩のTさんは、交響曲第40番を〝大草原で斬り！〟と評したものだ。返す刀で、中原中也に傾倒する畏友のN君は〝どこを切っても血が出るような音楽‼〟などと唸ったりもした。こうしたいかにも粗野な卓見は、クラシック音楽といえば即**・**ベートーベンと決めつけるそれまでの風潮に迎合しない。〝絶望から喚起へ〟と高揚するストーリー性も、起承転結のダイナミズムも、当時りの発展史観も何事も無い。有ることといえば、いレコードの中に圧縮された絶対現在の哀しみが、音響機器によって時間軸に放たれ、貧しい四軒長屋を貫いて、直線的に疾走しているだけだ。その心は、今・ここに、あるいは夢の中で、｢まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がする｣のであった。これで、〝何を不服を言うことがあろう〟〝えば海が黒くなり、空がに染まるごとに、モオツァルトのポリフォニイがするように鳴るならば〟**2)**。小林秀雄の口癖は〝ただ正しく考えるということだけ〟**3)**であったように記憶している。

Ⅲ 貧困と｢貧乏｣

村上春樹のこの小説を一読して感じられる筋立てのポイントは次の三つ。①一個人の特殊で不思議な住宅事情。②その社会的要因。それに、③そこまで行くかと思えるほどの、敢えて言うならその形而上的要因。まず、①の個別的要因とは、｢僕と彼女｣と｢一匹の猫｣が｢三角地帯｣という不整形地に住まざるを得ない要因としての〝貧困〟である。しかし、時代はエズラ・ヴォーゲルが〝ジャパン・アズ・ナンバーワン〟**4)**(1979年)と叫んだ、あの未曽有の高度経済成長の絶頂に向かっている。それでも、それともそれ故に、景気が過熱し地価が高騰する中で、我々日本人は〝ネコの額〟と〝ウサギ小屋〟に住み、個人も社会もで、｢ま、若いからね｣-｢ええ｣、という乗りで働き過ぎて、バブルの限界を超えた。つまり、経済社会はな形で繫栄していたことになる。ところが、当のこの小説は、その問題に直接突っ込まない。即ち、②の社会的要因を糾弾するようなスタンスを取らない。｢一九七三年だか四年だかの話｣と敢えて具体的な年代まで指定して、この問題の深刻さを淡泊に暗示するだけ……。その上、作者は、この癒しがたい不整形な貧しさを、〝貧困〟という客観的な用語で表現さえすることなく、これに｢貧乏｣というややナイーブな言葉をてた。古来この国に育まれた特有の心情は、苦役をも

〝勤労〟という尊い精神性に変換してしまう。働き方改革に取り組むたびに実感されることは、国際的な労働統計には決して表れないその幾重にも尊い価値である。それは、｢春がやってくると、僕も彼女も猫もほっとした｣、｢僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった｣などの述懐となって、読者をして共々に哀切極まりない抒情に誘うのみ。

Ⅳ 図形の処遇

それにしても、この小説には、幾何的な図形のイメージがに出没する。結論めいたことを先取りすると、それはこの作家に特有の③の形而上的要因に行きつくための書法(エクリチュール)と考えられる。なぜなら、字配りを坦懐に眼球に写してみると、それはあたかも〝形象信号〟の断続、あるいは実在の〝非連続の連続〟のように、何事かに収束するようにも、発散するようにも見えて来るのであるから。｢三角地帯｣や｢三角形｣は言うまでもなく、｢鉄道線路｣と｢国鉄線｣や｢私鉄線｣からは〝直線〟が連想されるとともに、二つの鉄道線が分かれる｢分岐点｣はまさに〝点〟である。それに、最も気になるのが〝円〟であろう。｢ホール・サイズのまるいチーズ・ケーキ｣(傍点引用者。以下同じ)のイメージは、｢鉄道線路をぐるっと迂回し｣、｢｢三角地帯｣を回り込む｣。それに不動産屋がわざわざ｢眼鏡をはずしてカーゼでレンズを拭き｣、かけ直して｢僕の顔を見た｣その｢眼鏡｣の丸み等々。問題は、ここまで図形を作為的に多用する作者の意図である。その糸口として考えられるのは、やはりあの｢ホール・サイズのまるいチーズ・ケーキ｣。これは、｢包丁で十二等分して｣できた｢三角地帯｣の母体としての〝円〟である。あるいは、｢ケーキ・ピース｣の分割を無限に施したらその極限もまた〝円〟となる。円の直線との違いは、線が曲がっていることであり、その曲がり具合を〝曲率〟という。円は曲率が大きくなるほど小さい円になり、逆に曲率が小さくなるほど円は大きくなる**5)**(【別掲図】参照)。このため、曲率が無限大(∞)になると円は点に収束し、逆に曲率がゼロ(0)になると円は直線に発散する。この事実にかなりの私見を交えると、〝点と点〟との｢コミュニケーションの分断というか分裂｣を、〝円〟が媒介して〝線〟にすることになる。〝点と線〟を〝円〟が媒介することにより〝非連続の連続〟が実現するのである。しかし、この〝円〟は｢湖の底に座っているみたいに静か｣で、からは形が見えない。また、｢ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった。電車は一日じゅう一本も走らなかった｣と語るように、日常のが無いことにとてつもない充実感をもたらす。表から形が見えないものや、形の無い充溢を〝形而上〟という。即ち、図式的にはこの境涯が、特殊な住環境という極め付きの不幸を、嬉々として選択するからこそ味わうことができる根源的な幸せの、③形而上的要因の正体である。

【注】

**1)**  司馬遼太郎 著『街道をいく1』朝日文庫(2008.8.) 瑠璃光寺 司馬遼太郎文学碑

**2)** 小林秀雄 著『モオツァルト』日本の文学43 中央公論社(1968.6.1)

**3)** 小林秀雄 著『私の人生觀 悪魔的なもの』人生論読本6 角川書店(1965.4.20)

**4)** エズラ・F・ヴォーゲル 著『ジャパン・アズ・ナンバーワン』TBSブリタニカ(1979.6.1)

**5)**  中内伸光 著『微分幾何学初歩』共立出版社(2005.9.15)

【別掲図】円の曲率（イメージ）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　円（曲率＝１÷半径(r)）

・

点（曲率=∞）　　　　直線（曲率=０）

※｢無限の曲率｣は、極大値が曲率無限大(∞)の**〈**点**〉**になり、極小値は曲率ゼロ(0)の**〈**直線**〉**となる。

こうして、**〈**円**〉**は、**〈**点**〉**にも収束し**〈**直線**〉**にも発散して、詰まるところ**〈**点と線**〉**を媒介するこ

とにより｢非連續の連續 ｣を実現するように見える。

「僕の貧乏」の象徴としての「三角地帯」

―村上春樹「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」を読む―

村上　林造

これは、「一九七三年だか四年だか」に僕が住んだ「チーズ・ケーキのような形」をした「三角地帯」についての小説である。それは、「先端の角度が三十度のケーキ・ピース」のような「不自然な形の土地」なのだが、僕はその「三角地帯」に二年間だけ住み、今、当時の「僕の貧乏」を振り返りつつそれについて語る。小説のタイトルが示すとおり「チーズ・ケーキのような形」（「三角地帯」）とは「僕の貧乏」の「形」なのであるが、それは言い換えれば、「三角地帯」とは「僕の貧乏」の象徴だということである。象徴とは、形のない事物や[抽象的](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8A%BD%E8%B1%A1%E7%9A%84)[概念](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A6%82%E5%BF%B5)（「僕の貧乏」）を具体的な物事や形（「チーズ・ケーキのような形」をした「三角地帯」）によって表現することであり、（例えば「鳩」を「平和」の象徴というようなもので）殊更珍しいことではない。しかし、この小説においては、象徴という方法を用いて世界を造形することが、そのタイトルによって宣言されていることになる。以下、その方法について検討してみたい。

１、「三角地帯」とはどんな土地か

僕は、その「三角地帯」ができた由来とそれに対する人々の評価について、次のように語る。

　どうしてそのような不自然な形の土地ができてしまったのか、とあなたは訊ねるかもしれない。あるいは訊ねないかもしれない。どちらでもいい。どちらにしても、何故そうなったのかは僕にもよくわからないのだ。地元の人に訊ねてみてもよくわからなかった。それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形であるに違いないという程度のことしかわからなかった。地元の人々はどちらかというとその「三角地帯」についてはあまりしゃべりたくないし考えたくもないという感じだった。どうして「三角地帯」がそんな風に―耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱われるのか、その理由はよくわからなかった。たぶん変な形をしていたせいだろう。

「どうしてそのような不自然な形の土地ができてしまったのか」は、僕にわからないだけでなく、「地元の人に訊ねてみてもよくわからなかった」。しかもそれについては「あまりしゃべりたくないし考えたくもないという感じ」で、人々はあたかも「耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱」っている。しかし、僕は「それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形であるに違いない」と語る。つまり、土地の由来が分からないにもかかわらず、僕は「三角地帯」がそういう形になったことには深い必然性があり、この後もその形は不変であることに深い確信を抱いている。この土地についての僕の関心の深さと、それについての地元の人々のいわくありげな無関心の態度とはっきりしたコントラストを示している。これはいったいどういうことなのであろうか。

また僕は、実際にここに住んだ経験に基づいて、「住み心地・居住性という観点から見れば『三角地帯』は実に無茶苦茶な代物だった」という。具体的には次のようなことである。

　まず騒音がひどかった。それはそうだ。なにしろ二本の鉄道線路にぴったりとはさみこまれているわけだから、うるさくないわけがない。玄関の戸を開けると目の前を電車が走っているし、裏側の窓を開けるとそれはそれでまた別の電車が目の前を走っている。目の前という表現は決して誇張ではない。じっさい乗客と目が合って会釈できるくらい間近に電車は走っていたのだ。今思い出してもたいしたものだという気がする。

　でも終電が通ってしまえばあとは静かじゃないかとあなたは言うかもしれない。（略）しかしそこには終電なんて存在しなかった。旅客列車が午前一時前に全部の運行を終えてしまうと、今度は深夜便の貨車の列がそのあとをひきついだ。そして明け方までかけて貨車がひととおり通り過ぎてしまうと、翌日の旅客輸送が始まる。その繰りかえしが来る日も来る日も延々とつづくわけだ。

　特急が通過すると、窓ガラスがピシピシと音を立てた。電車が通っているあいだはお互いの話は聞こえなかった。何かを話している最中に電車が通ると、我々は口をつぐんで電車がすっかり通りすぎてしまうのを待った。静かになって我々が話しはじめると、またすぐに次の電車がやってきた。そういうのってコミュニケーションの分断というか分裂というか、すごくジャン＝リュック・ゴダール風だ。

「三角地帯」の家とそのすぐそばを走る電車の間の間隔の狭さ、しかもそれが24時間休みなしに走り続けることで生じる「騒音」のひどさ、それらは写実的なありのままの描写というよりも極めて誇張された戯画的表現と言えるであろう。

また、「三角地帯」の家の「住み心地・居住性」のひどさの原因は、列車の騒音だけではない。それについて、僕は次のように語っている。

おそろしく建てつけの悪い家で、すきま風がいたるところから入ってきた。おかげで夏は快適だったが、そのかわり冬は地獄だった。ストーブを買う金もなかったので、日が暮れると僕と彼女と猫は布団の中にもぐりこみ、文字どおり抱きあって眠った。朝起きてみたら台所の流し台が凍りついていたなんてこともしょっちゅうだった。

これらの「三角地帯」の家の「住み心地・居住性」の悪さはすべて「僕の貧乏」の結果であり、確かに「僕の貧乏」と直接的に結びついているから、それらは「僕の貧乏」を象徴的に示すものといえる。そして、「僕の貧乏」とは金とモノを持たない僕の生き方のことであるから、この家の「住み心地・居住性」は、要するに1973～74年当時の僕の生き方を表現していることになろう。そして、僕はこの家の「騒音」を体験した後に、自身で決断してここに住むことを決めたのであるから、それは僕における明確な生き方選択であったといえる。「僕の貧乏」の象徴としての「三角地帯」にまつわる一部始終は、このような形で僕の考え方、生き方を表すことになるのである。

また、僕は、駅から見た「三角地帯」の見え方とその実際の位置関係について、次のように語っている。

駅から見ると「三角地帯」はすぐ近くに見える。でも実際に歩いてみると、そこに辿りつくまでにはおそろしいくらい時間がかかる。鉄道線路をぐるっと迂回し、陸橋を渡り、こぎたない坂道を下りたり上ったりして、やっと後側から「三角地帯」に回り込むのである。あたりには商店とかそんなものは一切ない。見事なくらいうらぶれている。

ここで僕は、「駅から見ると」「三角地帯」がどう見えるかとともに、実際にその場所に到達するにはどのような道のりをたどる必要があるのかを語っている。つまり僕は、僕自身の居住経験をもとに「三角地帯」の家の「住み心地・居住性」を語るだけでなく、それが世間の人々からどのように見えるのかにも触れているわけである。先に、「三角地帯」の家が「僕の貧乏」の象徴であるということは、それは僕という人物の生き方の表現であるということに触れたが、そのことを考えれば、僕は「三角地帯」の家について語りつつ、当時の自分自身の生き方が僕自身にとってどういうものであったかと同時に、世間の人々から僕の生き方がどのように見られ、扱われたかをも語っていることになる。「三角地帯」についての関する地元の人々の不自然な無関心の態度について先に触れたが、それも僕の生き方（「僕の孤独」）に対する眼差しに連動してくるはずである。それでは、「三角地帯」に象徴される「僕の貧乏」とは僕のどういう生き方をあらわしているのか、さらに見ていきたい。

２、僕はなぜ「三角地帯」に住むことを決心したのか

「三角地帯」の家の「住み心地・居住性」とそれに対する人々の態度、眼差し（関心）について見たが、それでは僕自身はそこでの暮らしについてどのように感じていたのだろうか。

まず僕は、三角地帯の「先端」から「電車の往き来を眺め」た時の感覚について次のように述べている。

　「三角地帯」の両脇には二種類の鉄道線路が走っていた。ひとつは国鉄線で、もうひとつは私鉄線である。その二つの鉄道線はしばらく併走してから、このくさびの先端を分岐点として、まるでひき裂かれるように不自然な角度で北と南に分かれるのだ。これはなかなかの眺めである。「三角地帯」の先端で電車の往き来を眺めていると、まるで波を割って海上をつき進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる。

　ここで僕は「電車の往き来」を忌避したり、嫌悪したりするのでなく、積極的に「電車」に立ち向かっていこうとする。「まるで波を割って海上をつき進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる」という言葉には、あたかも今から戦いに赴く戦士のような高揚感すら感じられる。

　そういえば、僕はいやいやこの家に住んだのではない。むしろ、積極的にこの家が気に入って、住むことを決心したのであった。しかし、僕はいったいこの家のどこがそんなに気に入ったのであろうか。

　まず僕は、それが一軒家であること、その間取り、広さ、猫が飼えるコトと家賃との関係について次のように語っている。

　我々がわざわざそのような場所を選んで住んだのは一にも二にも家賃が安かったからだ。一軒家で部屋が三つあって、風呂がついていて、小さな庭まであった、それで六畳一間のアパートと同じくらいの家賃なのだ。一軒家だから猫だって飼える。まるで我々のために用意されたような家だ。

また僕は、その家のたたずまいについても非常に気に入っている。

　でも騒音を別にすれば、家の雰囲気自体はなかなか悪くなかった。造りはたしかに古めかしいし全体的に傷んではいたけれど、床の間やら濡れ縁やらがあって感じは良かった。窓から射し込んだ春の光が、畳の上に小さな四角い日だまりを作り出していた。

　そして、僕が最終的にこの家を借りることを決心する場面は次のように語られる。

それは僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた。「借りることにしようよ」と僕は言った。「たしかにうるさいけれど、なんとか慣れると思うよ」

「あなたがそう言うんなら、それでいいわよ」と彼女は言った。

「ここでこんな風にじっとしているとさ、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」

「だって本当に結婚したんじゃない？」

「そりゃあまあそうだけどさ」と僕は言った。

普通なら耐え難い程の「騒音」を我慢してまで、僕がこの家に住みたいと思ったのは、その家のたたずまいや雰囲気が、「僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた」からであった。おそらく僕は「子供の頃に住んだことのある家」から平穏でのびのびした幼い頃を思い出し、安らかな懐かしさを感じたのであろう。そして、そのような穏やかな気持ちが「ここでこんな風にじっとしているとさ、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」という言葉となったのではないだろうか。おそらく僕にとって大切な事は、新婚夫婦と猫とで水入らずで暮らす親密な「家庭を持」つことであり、そのような僕の感覚は、彼女が「本当に結婚した」（婚姻届けを出した）という社会的認知とは異なるものである。そしてそのような「家庭を持」つためには、「一軒家で部屋が三つあって、風呂がついていて、小さな庭まで」あり、「猫だって飼える」ということが重要な意味を持っていた。だが「貧乏」であった僕は、「六畳一間のアパートと同じくらいの家賃」でそのような「家庭」を作るには、「騒音」に「慣れる」こともやむを得ないと考えたのであろう。そのように見てくれば、僕にとって、電車の「騒音」が何のメタファーであるかが次の問題になってくるであろう。

３、「僕の貧乏」に伴う「騒音」とは何の隠喩か

「駅から見ると『三角地帯』はすぐ近くに見える」が、「実際に歩いてみると、そこに辿りつくまでにはおそろしいくらい時間がかかる」という。また、「三角地帯」の僕は、電車に乗っている「乗客と目が合って会釈できるくらい間近に電車」が走る「二本の鉄道線路にぴったりとはさみこまれ」た家におり、僕自身が電車に乗って通勤や通学をしている様子はない。つまり、電車に乗っている人が会社に通勤したり、学校へ通学したりしているのに対して、僕はある組織（会社や団体、学校等）に属し、それに関わって収入を得たり、生活を維持、確保したりするという生き方をしていないことが窺える。もちろん、僕も何らかの収入を得ているのだろうが、それは自分の家と家族（自分と妻と猫）を養うために必要最低限のものであり、それ以上の高収入を得ようとしているようには見えない。そしてそのことは、僕が「ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏であった」ことと深く関係しているであろう。つまり、ここでの「僕の貧乏」とは、単に金やモノをもたないだけでなく、むしろ目に見えない大切なものを重視し、志向する禁欲的な生き方という意味が含意されているのであろう。つまり、「僕の貧乏」とは単に経済的な問題を指すだけに限らず、生活の仕方から考え方、生き方を指す言葉なのである。僕の場合、目に見えない大切なものとは夫婦と猫だけで親密な「家庭」を作り、「まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がする」生活を実現することであったのだろう。それに対して、一定の組織に守られて金やモノを得る生き方を選ぶと、一般的社会通念や組織の要求に従わされ、システムの歯車となることも求められるが、その見返りとして、物質的な豊かさが保証される（「貧乏」を免れる）。それに対し、自分の内的志向に基づいて独力で生きる者は、その代償として社会との摩擦や軋轢を避けることができない。以上のように見れば、組織への従属を拒否して「三角地帯」の家に住む「貧乏」な僕にとっての電車の「騒音」とは、社会との摩擦や軋轢、あるいは[不協和音](https://thesaurus.weblio.jp/content/%E4%B8%8D%E5%8D%94%E5%92%8C%E9%9F%B3)の隠喩ではないだろうか。

　以上のような文脈の中で春の鉄道「ストライキ」を見れば、それは、システムに組み込まれた歯車としての人間が、そのような仕事を拒否して自己を回復しようとする戦いであり、そのことによって仕事はストップさせられる。その時、「三角地帯」の家の「目の前を走っている」電車も止まることになる。その時の様子を、僕は次のように語っている。

冬が終わると、春がやってきた。春は素敵な季節だった。春がやってくると、僕も彼女も猫もほっとした。四月には鉄道のストライキが何日かあった。ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった。電車は一日じゅうただの一本も線路の上を走らなかった。僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった。

ここでは「ストライキ」によって、苛烈な冬と「素敵な季節」である春がくっきり対照させられている。僕は、「ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった」というが、電車の「騒音」が僕と社会との摩擦の隠喩であるとすれば、ストライキで「騒音」が停止した時、ひとときの「幸せ」が訪れるのは必然であろう。「僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった」というこの「幸せ」は、僕が「貧乏」を選んだことによって実現したものであり、両者は切り離すことができないコインの両面をなしているのである。その関係性を表すのが「金がなければないで人生はすごく簡単だ」という言葉であろう。この言葉は、システムに支配されることなく、独立した自由な生き方を目指す者だけが「簡単」な「人生」を手に入れることが出来ること、その「人生」とは「金」と無縁であり（「貧乏」）、それが僕の求めた「幸せ」であった。ストライキの日に「まるで湖の底に座っているみたいに静か」な線路で、「猫を抱いて…ひなたぼっこ」する「僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった」という。それは金を持たない「貧乏」な者にしか訪れない「幸せ」であり、そこに「僕の貧乏」が「チーズ・ケーキのような形」をした「三角地帯」によって象徴される必然性があるといえる。

ここで、僕がそのような「幸せ」を手に入れ得たことの原因が僕の性格によることは否定できないが、同時に僕が若かったことは見逃せないであろう。僕が、この「三角地帯」（「僕の貧乏」）の「不自然な形」について、「それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形である」というのは、これがどの時代でも変わることのない若者の感覚と生き方を指しているだろう。作品の始めに、僕は「地元の人々」が、「「三角地帯」についてはあまりしゃべりたくないし考えたくもないという感じ」であることに触れ、「どうして「三角地帯」がそんな風に―耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱われるのか」という「その理由」に関心を向けながら、それは「よくわからなかった。たぶん変な形をしていたせいだろう」という推定を述べるにとどまっていた。しかし、以上の考察を踏まえて言えば、それは若い人の生き方に対して上から目線で「若気の至り」と見る年配者の態度なのではないだろうか。それは、当時の僕と不動産屋が、「騒音」に慣れられるのは「若いから」だという見方において一致したことの中にも示されていよう。しかし、ここでの「若さ」とは、一般的な社会通念に逆らってでも自己の内発的志向に従う生き方を指すのであって、必ずしも具体的な年齢を指すのではない。実年齢はどうであれ、現世的利害に流されて自分のかけがえのないものを見失い、社会通念との摩擦に耐えられなくなった時（「俺、あそこ行くと頭痛むんだよ」）、彼は「本当の幸せ」（「まるで湖の底に座っているみたいに静か」で「太陽の光はただだった」）をも見失うのであり、同時にその時人は「貧乏」でなくなり、「若さ」を失うのである。

４、「僕の貧乏」の象徴として「チーズ・ケーキのような形」をした「三角地帯」を語ること

「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」とは「若い」人に固有の「貧乏」であり、それは、自分にとってのかけがえのないものを守って支配的社会通念との摩擦を引き受ける生き方の隠喩であると述べた。「チーズ・ケーキのような形」をした「三角地帯」が「若い」人の「貧乏」の象徴であるとはどんな時代にも妥当する物語であり、「金があることによって人生はすごく複雑になる」というのは、一般的普遍的な命題であろう。その上で、僕は結末近くにおいて、「結局我々はその家に二年住んだ」と語って、現在はもうその「三角地帯」に住んでいないことを明らかにし、作品結末を次のように結んでいる。

　僕は今でも「貧乏」という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す。今あの家にはいったいどんな人が住んでいるんだろう？

僕は「本当に幸せだった」その経験が、「若い」時の「貧乏」の中でのみ醸成されることを確認し、そのかけがえのない「二年」を慈しみながら回想するとともに、今も「あの三角形の細長い土地」の「あの家」には誰か若い人が住んでいることを疑っていない。僕は、「三角地帯」の「あの家」は、時代が変わろうと必ず「若い」人に引き継がれる普遍的なものと考えているのである。

しかし他方で、僕がこの出来事を「一九七三年だか四年だかの話」と限定していることも見逃せない。それは1960年代末期の学生運動の熱気が濃厚に残る時代であり、人々が世間の価値観への異議を申し立てて、自分の生き方を模索する時代であった。当時の日本人の生活は金やモノが豊かとはいえなかったが、当時の若者は必ずしもそれを不幸とは思わなかったし、不安におびえることもなかったからである。そういう中で多くの若者は納得できる生き方と社会の実現を求めて学生運動に参加したのであり、それは一種の理想主義の時代であったといえる。しかし、1960年代末に政治運動としての理想主義が挫折するに及んで、その後の日本社会は急速に物質的繁栄を重視する方向にシフトして行く。しかしその後も、青年は物質的豊かさを追い求める時代の風潮に抗して自分の生き方を模索しようとした。それは、社会の主流をなす年配者の立場から見れば、どんな時代にもある世代間の価値観の対立であり、「世間知らず」な若者の「若気の至り」と見えたであろう。そして、ここで取り上げた「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」は、まさにこの段階の青年のありようを描く作品であり、その中で僕が、「金がなければないで人生はすごく簡単だ」と語る感覚には、1970年代以降、物質的豊かさを重視する方向に傾斜する世間の「貧乏」蔑視に対して、理想主義的な見方を回復しようとする姿勢が示されていよう。しかしその後さらに時代が進み、1980年代に入ると、日本社会は豊かな時代となっていく。そこでは、「みんな歳をとって、何となく何とかなってしまった」というのと「同時に世間の風潮」が変化したのである。つまり、「世界が貧乏というものをあまり評価しなくなったのだ。貧乏というものがただの金のない惨めな状況としてしか捉えられなくなってしまった。だから貧乏自慢なんてもはや全然意味を持たなくなってしまった」のである。「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」は、1973年～74年の青年を1783年から振り返った小説であり、つかの間の「貧乏という状況」を追憶し、祝福する小説であるともいえるし、そのような時代把握にはその時代を青年の一人として生きた村上春樹自身の感覚と認識が生きていると言える。

しかしこの小説は、「僕の貧乏」にアプローチするために、その象徴として「チーズ・ケーキのような形」をした「三角地帯」に眼差しを向け、それによって単なる経済的事象としての「貧乏」とは全く異なる、僕の人間としての生き方（「僕の貧乏」）の次元を開くことに成功したのであった。それは、ある具体的事象を目に見えない概念やその意味（「僕の貧乏」）の象徴とすることで人間の生き方、考え方とその意義を造形する方法であり、それは象徴的手法による作品創造の方法であるといえる。